

# 現代を斬る

## 日本人に欠けがちな 外から自国を見る視点

日本医療政策機構代表理事  
政策研究大学院大学名誉教授

黒川 清



ベトナム戦争さなかの冷戦時代に医学の研究者として渡米、個人の立場で道を切り開き、その中で外から日本を見る目を養った黒川清氏。帰国後は後進の育成に努めるだけでなく国家を「診断」、さまざまな提言を行ってきた。

### Profile プロフィール

**くろかわ・きよし**  
1936年生まれ。東京大学医学部卒業、69年に渡米、ペンシルバニア大学助手、UCLA内科教授などを経て83年帰国、東京大学内科教授、東海大学医学部長、日本学術会議会長、内閣府総合科学技術会議議員、内閣特別顧問、世界保健機構(WHO)コミッショナーなどを歴任し、2011年12月～12年7月には国会による福島原発事故調査委員会委員長を務めた。現在、政策研究大学院大学名誉教授、東京大学名誉教授、東海大学特別栄誉教授、マサチューセッツ工科大学客員研究員、2013年の英国G8サミットで発足した世界認知症協議会メンバー、など。

—— 黒川先生は医者立場を超え、政策提言などをしてこられました。その目からみて、日本社会がこの30年ほど世界の潮流に乗り遅れてしまったのはなぜだとお考えですか。

黒川 日本は開国してから今日まで、わずか150年ちょっとしか経っておらず、その前の250年間は鎖国していました。それはほんの数代前の出来事です。そうしたメモリーに刻まれたものって、そう簡単には変わりません。日本人が変われない理由もそこにあるでしょう。

何しろ日本が鎖国を始めたころ、世界はようやく大航海時代に入ったところでした。人が大きく動き出した時に鎖国をしたものだから、江戸末期にペリーが黒船に乗ってやってきてびっくりし、岩倉使節団をはじめ多くの人たちが世界に出ていって、さらにびっくりすることになったわけです。

——その間にイギリス産業革命やアメリカ建国、フランス革命などが起こり、欧米では社会も、技術も大きく変化し、中国をはじめ近隣諸国は植民地化されていたと。

黒川 そう。日本は、世界が一番動き出した時に鎖国したわけですから。江戸時代に徳川幕府が鎖国政策をとったのは、国の統治としてうまくいったけど、その間に世界はものすごい変化が起きていました。でも、日本

はたまたま江戸幕府の体制がうまくいっていたから、その成功物語が頭にこびりついてる。なかなか変わらないんだろうなと思う。

107人もの岩倉使節団がヨーロッパ諸国とアメリカを訪れ、2年もかけてすごく勉強し、陸軍はフランス、海軍はイギリス、政治はちよど一つの国になったばかりだったドイツをまねて——と、各国のいいところ取りをし、頑張った。しかも日清戦争、日露戦争で勝ったものだから、有頂天になっちゃうわけです。これ、日本人の悪い癖ですね。『ジャパン・アズ・ナンバーワン』なんて本が出るとバカ売れするのも、海外の人に褒められると簡単に天狗になりやすい。250年にわたる鎖国の影響なのか。基本的に異民族に虐殺された歴史がないこともあるのではないかと考えたりしてしまいます。

——しかし、太平洋戦争では日本国内でも多くの死者が出ました。

黒川 でも異民族に目の前で虐殺されたのは沖縄。あとは硫黄島など太平洋戦争の島々です。東京でも大空襲はあったけれど、敵の顔は見えていません。だから終戦でアメリカ人が来たら「ウエルカム」になってしまった。

—— たしかに、焼夷弾を落としたパイロットの顔は見えませんか。

黒川 そう。対して、陸上戦で殺される経験をした沖縄の人々の思いって相当なものでしょう。あの時、沖縄の道は死体だらけだったそうです。そのことを当時から生きている人は皆覚えていきます。それを私たちは理解しなくてはいけない。もし日本が本土での陸上戦を経験していたら、「日本人とは」を考えることにもっと真剣になれたでしょう。異民族に虐殺された歴史がないのは、不幸中の幸いでもあり、弱みでもある。歴史的コンテクストを認識していないところは問題であるように思います。

### 戦後復興は冷戦の恩恵

——しかし終戦後、日本は経済成長を遂げます。

黒川 日本がそれをできた理由は、世界のパラダイムが冷戦になったことがある。あの時代、それまでのバックスプリングから、バックス・アメリカナになりました。そして、冷戦になると、東西対決の西側陣営のフロントになったのが日本やドイツなどです。日本を占領していたアメリカは、朝鮮戦争が始まると、日本に後方基地をつくりました。最前線として軍の飛行場や軍港をつくりましたし、日本を後方工場として使い、モノづくりなどが盛り上がり、一気に経済がよくなりました。そして朝鮮戦争後に朝鮮は南北に



分断。その後は南北ベトナムの戦争です。アメリカはまた日本、フィリピンなどを冷戦アジアの後方基地に使いました。

こうして冷戦の枠組みがあったからこそ、日本は戦後復興がうまくいった。国家の大きな枠組みはアメリカが決めていたのです。

—— 運が良かったと。

黒川 そうです。でも、うまくいきだすとうぬぼれるのが日本人の悪い癖。その背景は何かといえば、外から日本を見る感性がなかったということ。それができる日本人が圧倒的に少なかったからです。

—— その延長線上に平成の30年間と今があり、その間に起こった変化に、自力では対応できなかったということですね。

黒川 平成を語るうえで大きなパラダイムの変化が2つありました。平成元年にベルリンの壁が崩壊した「冷戦構造の終焉」、そしてインターネットの始まりです。その結果、今まで見たことのない、全く思いもかけなかった「混乱の世界」が現れました。グローバルになって誰もが情報を発信できるようになったのはいいけれど、情報が拡散して、誰を信じていいのかわからなくなっています。

—— 先生が渡米されたのは、ベトナム戦争さなかの1968年ですね。

黒川 そうです。ベトナムで米軍による北爆が始まった翌年、ペンシルバニア大学に研

究留学で渡米しました。先輩の紹介による2年間の予定の留学でした。

学生運動や政治闘争にあまり興味なかったし、ちょうどいいなど。そんなふうにも考えないで行っちゃったんです。

—— それが、15年にもわたり滞在することになったのは。

黒川 2年間の留学期間が終わろうとしていた時点で、UCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)に私のペンシルバニア大学のテーマに近い研究をしている腎臓内科グループがいたことから、あと1年だけ延長する前提で移ったんです。そうしたら面白くなってきた。「あと1年やらないか」と誘われたものだから、東大側にお伺いをしないでOKしてしまい、「これはもう破門だな」と。3年未満で日本に戻らないといけないという暗黙のルールがありましたからね。

—— 帰る先を失ったと。

黒川 まあ、お願いすればなんとか帰れたとは思うけど、カッコ悪くて言えない。その時点で35歳になっていましたし、妻も子供もいましたから、将来どうなっちゃうかなと不安になりました。それまでは「お客さん扱い」だったけど、これからの競争相手は同年代のあちらの医師たちになる。日本の医師免許はアメリカでは認めてもらえないから、とにかくアメリカの医師免許を取ろうと調べ始め

長くなっちゃったけど帰らせてください」と教授に頼めば、おそろく帰れたと思う。けれど、わかっていても難しい道を選んだのは、私の性格ですね。どうも私は、普通は選択しない方を選び、バカだなとわかってることをやってみようというです。

人間は「頭」と「こころ」と「へその下」で、外界とかかわりながら成長していく存在です。「頭」というのはいろいろな知識、記憶です。人間の身体の中で最も長けている部位はこの「頭」だと考えている人が多いですが、ノレッジ(知識)においてはいずれもコンピュータやAIに負けます。それでもあった方がいい。「こころ」というのは、例えば誰を好きになるとかいうことなどで、これは実体験がものをいいます。人は実際に体験した出来事しか感覚的には理解できないのではないかと、と思います。

そして「へその下」とは、どちらかに腹を決める、何かの決断をするということ。基本的に選択には大きく二つしかありません。例えば多数派につくか少数派につくか、幼少期なら親の言うことを素直に聞か(あまのむく)か、保守か革新か——。この選択の枠組みは、親の仕事とか、両親の仲、兄弟姉妹の数やその中で自分の位置といった育つ環境によって10歳までにはほぼ決まっているのだと思います。それ以降に変えようとしても難しい。親

ました。

フアクスもない時代だから、手紙を書いて日本から成績証明書を取り寄せたり、日本語の書類を訳して、その訳が正しいことを証明してもらったり。弁護士に頼むお金なんてないから、全部自分でやりましたよ。試験勉強は夜と週末。昼は実験、セミナーなどがありますからね。

それでも日本のことは気になります。ベトナム戦争が終わった時もそうでした。社会主義国家となったベトナムからポートピアブルとなって逃れた南ベトナムの人たちを、日本は受け入れなかったでしょう？ あれはすごく恥ずかしい思いをしました。日本はアジアの一員です。しかもアメリカ側、西側陣営でしょう。彼らは南ベトナムから逃げてきた人たちなんだから、受け入れてやれよと思っただけで、日本にいる日本人はそう思わない人たちが多いのでしようね。日本という国家が世界からどう見えるかは、独立した個人として海外で活動しているとよくわかります。これは、ひも付きでの海外生活ではわかりにくいことですね。

## 人は頭と「こころ」、へその下

—— 帰国後の席が保障されている立場から、個人の立場へ移られた先生ならではの見解ですね。

の言うことを聞く子はずっとそのまま。天の邪鬼な子もそのまま。私はどうも後者ですね。だって無茶でしょう？ 2人の子供もいるのに、破門になっても留学先に残るなんて。

—— 先生はどのような幼少期を？

黒川 家は荻窪でしたが、両親とも熊本出身で、父方は明治維新のころからの医者の家系。父は第五高等学校から東大医学部を出た3代目です。母方の祖父も五高から東大に入って学び、師範学校の先生などを務めた人で、母も女子師範学校を出ていますから、当時では数少ない高等教育を受けたファミリーといえます。

そんな家に長男として生まれ、なんとなく自分は医者になるのかなと思ひ、その道に進んだ私が、どうも変な選択をするのはなぜだろうかと、最近考えるのですが、それはたぶん、幼稚園のころから「胸に水が溜まっている」と言われていたからではないかと。しかも病弱な身体でしたし。結核は1950年代まで死因No.1の病気でしたから、「いつか死ぬかもしれない」との思いが子供のころの私の頭にあつたことが、あえて天邪鬼的に選んでしまうのかもしれない。

## 忖度、無責任を生む土壌

—— 15年も過こされたアメリカで特に感じられたことは。

黒川 強烈に感じたのは、日本のような厳格なタテ社会じゃない分、自分の目標となるロールモデルや導いてくれるメンターに出会う機会が多いということでした。

まずアメリカに行つてすぐ、内科医でもある生化学のチエアマンだったボスに、「最初に言っておくことが3つある」と言われたこと。これが私の人生を変えた気がします。

1つは留学期間中に独立した研究者になること。「そのためには何の研究をやってもいい」と。

2つ目は、私は日本で内科と腎臓内科の研修を終えていたので、「あなたは学生や大学院生ではなく既に一人前の医師なのだから、セミナーやカンファレンスでは自分の意見を言うこと」。日本の医学界では、自分のやりたい研究をやるとか、目上の人に意見するなんてタブーですから、衝撃でした。

そして3つ目として、「英語で会話をしている理解できないときは、すぐに『わからない』と言つこと。私は君たちと対等なんだから」と言われました。内科医でありながら基礎分野の人で、研究者をいかに育てるかを重視しておられたのだろうと思います。

—— 日本の大学は、明治期にドイツ式を参考にして作られ、戦後はアメリカ式に変える試みがなされたようですが、内容は相当違っていたと。

意見、異論は言いにくい。それは組織が大きくなるほど色濃くなります。

## 一人一人が責任を果たす

—— 先生は福島第一原子力発電所事故の国会の作った法律に基づいた唯一の調査委員会、つまり国会による「東京電力福島原子力事故調査委員会」の委員長を務められ、2012年7月に提出された報告書では、すべての関係者がそれぞれの責務を果たしていなかったために起こった「人災」だったと結論づけられました。その根底にも、そうした日本の教育、社会の土壌が無関係ではありませんね。

黒川 事故の引き金となったのは地震と津波ではあるものの、人災であったと結論付けました。東京電力、政府、役所、規制当局（原子力安全・保安院）などの関係者が、原子力施設の安全性を世界の標準に合わせ、高める責務を果たしていなかったために起きた人災です。例えば本来は国民の安全のための組織である規制当局は、原子力利用の推進を前提として東京電力の側に立つようになっていました。この相互にチェック・アンド・バランスが働かない社会であるというのも日本社会の大きな弱点です。

あの委員会は国会の委託を受けたものですが、政府をチェックすべき国会による独自

黒川 ええ、それで戦後は東大でも教養学部ができたけれど、内容は違います。ハーバードとかプリンストンとか、アメリカのトップクラスの大学ではどんな本を読まされると思いませんか？ 頻度が高いトップ10は、プラトンの『国家』、トマス・ホップスの『リヴァイアサン』、マキャヴェリの『君主論』と続き、アリストテレスは『倫理学』『政治学』の2つなどが入っています。

またアメリカは宗教的な理由でイギリスから逃げてきた人たちがつくった、ロイヤルファミリーもない民主制度の国ですが、それをフランス人のアレクシ・ド・トクベルが論じた『アメリカのデモクラシー』やマルクスの『共産党宣言』などもトップ10と、読まされる頻度が高い。

授業は、先生が講義をするのを生徒が聞くのではなく、それらの本を読んでいることを前提に皆で議論をさせるから、読んでいないと授業に参加できないことになる。しかも、大学の入学時では文系とか理系に分かれていません。

—— 多様な考え方が出やすくなって議論が深まるわけですね。

黒川 私が思うに、日常的に議論する時に、無意識に歴史の長さや哲学を感じる。古

の調査委員会設置が憲政史上初めてであったこと自体、日本の三権分立の機能不全を示しています。そしてこの弱点は、モノづくりの技術についても同じでしょう。テクノロジィがよくても、ドツポにはまってしまい、お客さんにとって価値のある商品になれないことが起こり得ます。大きな枠組みで、自ら目標、目的を考えるようにするには、子供の時からそういう教育も大事ですね。

—— 近年では日本企業が基本としてきた終身雇用は崩れつつありますが、それでいてタテ社会は強固なままのようです。

黒川 ええ、極端なタテ社会というのが、そもそも日本の一番の問題でしょう。銀行で5年、10年と勤めたらその人は「バンカー」です。海外で「バンカー」ですと紹介されると、「どこにいたの」と聞けば、「ここ、ここ」とこの銀行にいて……と答えることがよくある。でも、三菱UFJにいた人が三井住友銀行に移れますか？ 日立に入社して10年ほど技術開発に携わった人がパナソニックに移れますか？ ヨコに移れないタテ社会だから、何かおかしいと思っても、自分の出世や保身のために意見や異論を言いにくい、決める立場の人が決めない。これはアカウンタピリティーの対極にあります。

—— 日本ではアカウンタピリティーは「説明責任」と訳されますが。



典です。自ら「WHY」を考える思考が育つのではないか、と思います。

一方、日本の授業は「HOW TO」が中心です。教科書を覚えることが教育で、その頂点が東大です。私は東大に入った若者たちは評価するけれど、何でも知っている才能を生かせるのは、クイズ番組。学生は先生が話していることをノートにとり、その先生のテストの成績が良かった人がエリートになる。バカげていると思いませんか？ これでは、意見すると後に響く、言われた通りにしかやらないなど、付度や無責任になりやすい土壌が育ちます。社会に出て、出世や保身のため

黒川 アカウンタピリティーは、説明をすればいいというものではありません。自分の立場としていろいろ意見を聞き、責任をもつて決める、そして実行すること、つまり「結果責任」です。「責任を果たしていますか」と問われて、「果たしていると考えています」と答えられることがアカウンタピリティーです。

—— 弊誌の読者にメッセージを。

黒川 一人一人が自分は組織の、そして社会の中で何をすべきかを考え、実行しないといけないんです。それは、個人で、外から見る日本を体験しない限り、感性としてなかなかわからないと思う。それにはひも付きの出張や留学ではなく、個人の資格で外に出てみる。例えば、大学生時代に1年間休学してでも外に出てみる。日本の弱点を感じ取り、それが健全な愛国心を生むと思います。企業はそうした人をまたもつともっと受け入れてほしいですね。

—— ありがとうございました。